
コネクト

クロア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コネクト

【Nコード】

N9337U

【作者名】

クロア

【あらすじ】

時に二十一世紀末、科学と魔術が互いに発展した世界。

その世界は『体術』、『魔術』、『能力』によって発展した。

現在、世界では2つのことに力が注がれている。

1つは、新たな力への解読。もう1つは力を使いこなせる者の育成。つまりは『適能者』の養成だ。

その中でも、5本の指に入る養成機関、それがクロニクル学園だ。

プロローグ

科学と魔術が世界の交じり合う世界。

現在、世界人口の約6割が『魔術』、『能力』いずれかの力を引き出せる。

また、『体術』の力を入れれば、約9割の人間がなんらかの力を持っているとまでいわれている。

世界がこのようなになったのは、紀元前まで話をさかのぼることになる。

太古の昔、三賢人と呼ばれていた者がいた。

その三賢人は人々に3種類の力を与えた。

武神と呼ばれた者は、敵から身を守る術として、『体術』という朱の力を与え。

魔導師と呼ばれた者は、想像を具現化させる力、『魔術』という碧の力を与え。

文明の母と呼ばれた者は、科学の原点とも言える力、『能力』という蒼の力を与えた。

この力を授かった古代の人々は、自ら文明を発展させたと言われている。

現在、残っているエジプトのピラミットやナスカの地上絵、マチュピチュの遺跡などの歴史的建造物もこの力を用いて造られたと言われている。

二十一世紀末の現在、この3つの力は様々なところで恩恵をもたらしている。

魔術を基盤においた医療機関においては、難病と言われた病気でも『魔術』の力で完治させたり、災害のとき『体術』を使うことで人命救助などに役立っている。

また、科学の力で発展したもの全ては『能力』の影響を受けたとまで言われている。

だが、歴史上において、全てが良い恩恵をもたらした訳ではない。例を挙げるならば、中世の時代に行われていた魔女狩りだ。

庶民の間にまだ『魔術』の存在が広まって居なかった時代。『魔術』を使える者は異能者として恐れられ、迫害を受けていた。

また、世界中で行われた数多の戦争も、力と力のぶつかり合いや、すべての力を独裁しようとした者によって起こされたといっても過言ではない。

それは、二十一世紀の現在でも例外ではなく世界の一部で紛争が続いている。

現在、世界各国では、2つのことに力が注がれている。

1つは、3つの力の研究だ。

この3つの力の全容は現在の技術を持っても、全てが明らかになったわけではない。

力の存在が周知の事実となったのが、今から約300年前、産業革命の時だ。

また、力を簡単に引き出すための装置、簡易演算システム（以下 S・C・S）が開発されたのが二十世紀末のことだ。まだ、日は浅い。

だから世界中の国では、いまでもこぞって研究し続けていて、最

先端の技術と知識を追い求めている。

もう1つは、高レベルに力を引き出せるもの、『適能者』の養成だ。

世界人口約65億人の内、『適能者』の数は1000万に満たない。

『適能者』の存在は、絶対である。『適能者』の数は国の力そのものとまで言われており、それを保持するということは、すなわち国を保持することに繋がるのだ。

各国は、この力を保持するため、主に2種類の機関、『国立機関』と『独立機関』が尽力を注いでいる訳だ。この2つの機関は異なった性質をもっている。

国立機関は、その名のとおり、国が主体となって活動している機関だ。国の直属の機関ということで様々な支援を受けられるという利点があるものの、あまりに独立的な養成がないという欠点を持つ。

それに対して、独立機関は、企業が出資して成り立つ機関だ。企業からの出資のため、あまり支援を受けることができないが、独自の養成を行えるという利点をもっている。

それぞれの機関は、互いにメリット、デメリットを持ちながらも、『適能者』を養成しているわけだ。

その中でも、最も多く『適能者』を輩出しているのが、5つの学園だった。



入院していた俺の元に入学通知が来たのは2ヶ月前のことだ。

当時、俺は難病にかかっていた。

S・O・P・S（感覚器官付随症候群）。これは、身体の五感、つまりは感覚器官がしだいに失われていく病気である。発祥原因は不明で高レベルの力を使える者にのみ発祥する病気だ。

すでに俺は、左目は病魔に侵され視力がほとんどなく、瞳の色も緋色に変わってしまった。

この病気は現代の力を持ってしても治すことの不可能な病気、つまりは不治の病と言われている。

ある日の夕方、俺の病室に数人の来訪者がいた。

来訪してきた者たちは全員身長が190センチ以上あり、ガッチリとした体系で、サングラスういかけている。一目見た姿はどこかのボディガードを思わせた。

当然、俺には面識のない人たちだった。

「君は、九条 桜夜かな？」

「はい、そうですけれど。あなた方は何者ですか？」

「これは失敬。私たちはこういう者だ」

そういうと男らのリーダー格は胸元から名刺を取り出し、桜夜に渡す。

今の時代に紙の名刺とは変わっているな、と思いつつ受け取る。

「クロニカル学園入選人事部……？」

桜夜の頭の中にふと疑問が浮かび上がる。

クロニカル学園と言えば世界の最も最先端に行く5本の指に入る学園の内の1つだ。

たしか、『適能者』の輩出は世界第3位のはずだ。

「その入選人事部の皆さんが俺になんのでしょうか？」

桜夜は名刺を手元に置きながらそう答えた。

「実は、我々の理事長にある資料を渡すように頼まれたのだ。これを受け取りたまえ」

そういうと、1通の封筒を差し出してきた。

桜夜はそれを受け取ると封筒の封を切った。

中には色のきれいな便箋と、契約書のような紙が1枚ずつ入っていた。

桜夜は便箋を手にとると読み出した。

「九条 桜夜様

まずは、唐突にこのような案件を提示したこと謝罪する。

あなたもクロニクル学園からの通知と聞いて驚いていることだろう。

手短に話すと、今回の案件は貴方の病のことについてだ。

我々は貴方の病が現代の力では治らないということを知っている。

しかし、この病の進行を止められるというならどうだろうか？

知ってのとおり、我が学園は世界の最先端を行っている。

それは、医療技術の場面でもだ。

しかし、我々の技術を持ってしても、残念ながら完治させることはできない。

だが、止めることは可能だ。

そこで私はある条件付きで君の病気を無償で治療と考えている。

その条件と言うのが、我が学園への入学ということだ。もちろん、一般性としてではなく、特待生としてだ。なぜ私がこのような扱いを取るかと疑問に思うだろう。その理由は君の所持している唯一無二の力を保持したいと、言えば理解してくれるだろうか？

その力をぜひとも我が学園で奮っていただきたい。では、良い解答が聞けることを祈っている。

長

クロニクル学園 理事

「理解して頂けたらどうか？」

「ええ、まあ」

桜夜は驚いた。まさかこの病気を治療することができるなんて、それに、世界でも最も有名と言われている学園にも入学することができる。まさに、幸運と言うべきではないのだろうか。

「この紙にサインすればいいですか？」

「ああそうだ」

桜夜は、自分の名前を書き記した。

その書類にサインしたその日から、俺の新しい人生は始まった。

01 入学前

独立機関クロニクル学園。

関東地方の東部に位置したこの学園は、大きさにして東京都約四分の三という広さを持つ。

とてつもない広さだと感じるが、『適能者』の養成機関の中では珍しいことではない。

アメリカでは、1つの州が丸々養成機関となっていてところもある。

それだけではない。クロニカル学園には世界最高峰の設備が備わっている。

学食から学園内の備品、しいては生徒の使用するものの全てが最新のものだ。

世界中の先端はこの学園に集結しているとも言われている。

S・C・Sの開発に初めて成功したうちの1つもこのクロニカル学園だ。それだけで技術力の高さがうかがえる。

また、学園内は自然が豊か、なおかつ、近代的な建物も点在していて、さながら日本の良いところを小さく凝縮したようなものだ。

設備もさることながら、もっとも驚くべきことは在籍している生徒だ。

すべての生徒が『準適能者』もしくは、『適正者（準的能者ほどではないが力を出せる者）』ということだ。

つまりは、ここに在籍している生徒は、力の使用においてエリートということであるということだ。



入学式当日、俺は少し早めに向かっていた。

それは、式に遅れないためということもあったが一番心配していたのは、道に迷うことだ。

なんせ、学園の広さが広さだ。

もちろん、位置情報や移動方法は事前にデータとして送られてきたのだが、念には念を入れてだ。

桜夜は、データを頼りにしながら、入学式の会場へと向かっていた。

その行く道の両側には満開の桜が咲いていた。

「きれいだ！」

自然とその言葉が込み上げてきた。

まるで、桜たちが入学を勝ち取った者たちを出迎えるようだった。さすがは、日本の桜100選に選ばれている桜だ。

そんなこと思っているうちに、早々と会場に到着してしまった。

「予想していたのよりも早く着いちゃったな。とりあえず受け付けは済ませておくか」

桜夜は、そうつぶやくと受付のほうへと向かった。

受付の前には女性がいた。制服を着ているから、恐らく上級生なのだろう。

「新人生ですね？クロニクル学園への入学おめでとうございます。では、こちらの方へサインをお願いします」

そう言うと、女性は1枚の電子ボードを手渡してきた。

透き通るような声だ。清楚な容姿もあってか、優等生の雰囲気を感じていた。

「これでいいですか？」

俺は電子ボードに九条 桜夜と書き込んだ。

「ええ、しょうしようお待ちください」

どうやら、データと照合しているらしい。

「確認がとれました。これが、学生証明書、学内施設利用のID、となります小型端末です。なくさないようにしてくださいね」

そう言われると、桜夜は1枚の透明なカードを受け取った。

どうやら、この学校は身分管理をデータ端末で行っているらしい。

「ご親切にありがとうございます」

「いえいえ、あら？あなたの制服についているバッチって特待生のじゃない」

女性は、俺の胸ポケットのほうを指差していた。

この学園において、一般生とは別で特待生には証として他とは異なるバッチが送られる。

おそらく、一目見て区別できるようにだろう。

俺はこのバッチが好きではなかった。

「そうですね、そんなにこのバッチが珍しいんですか？」

「ええ、特待生はこの学園の1パーセント位ですからね。私が今日あった人ではあなたが初めてです」

「そうなんですか、かなり少ないんですね」

「そうですね。でも、特待生だからと言って差別とかはないので安心してください」

女性は優しくそう言ってくれた。ふと確認すると女性の胸にも桜夜と同じバッチがあった。

（なるほど、この人も特待生というわけか）
そうわかると、なんだか少し安心してしまった。

「あの、まだお時間がありますのでよかったです、少し学園内を周って見たらどうでしょうか？」

桜夜は先ほど貰った端末で現在の時間を確認する。
どうやら、式までまだ1時間半もあるらしい。

「そうですね、そうしてみます。いろいろありがとうございます」

02 会場へ

桜夜は、立ち並ぶショップを転々と周っていた。

その中でも、特に目に留まったのが電子機器系のショップだった。クロニクル学園の技術力は非常に高い。

この渡された小型端末を見ればわかることだが、これは現在世界最先端規格の内の1つだ。

この端末のプログラムを開発したのもこの学園らしい。

さらに言えば、この学園が独自開発したS・C・Sの性能も高さに目が引かれる。

性能は従来製品の5年は先を歩んでいるとも言われており、今や全世界の2割ほどのシェアを誇っている。

その製品は学園内の電子系のショップで取り揃えられており、桜夜はそれを眺めていたわけだ。

製品を見ていると、桜夜の目にショーウィンドーに映る自分の姿が目に入ってきた。

今、俺の左目は右目となんら変わらない色をしている。

桜夜は、医師から言われたことをふと思い出した。

それは、治療後に言われたことだった。

「これであなたの治療は一通り終わりました。」

「結果はどうだったんですか？」

「まず、あなたの失われた左目の視力ですが、病気の進行が止まったせい、取り戻すことに成功しました」

「ということは左目はもとどおりというわけですね？」

「ええ、基本的にはそう言うことになります」

基本的には……その言葉が桜夜に引っかかった。

「基本的にはとはどういうことですか？」

「それはこれから順を追って説明します。まず、この病気を発祥した者の症状として感覚器官を蝕んでいくことはお分かりですね？」

「はい、でもそれがどうかしたんですか？」

「その症状の副産物として、力を使った時、その病魔に蝕まれていたところの身体能力が飛躍的に上昇することがわかりました」

「つまり、どういうことですか？」

桜夜はそのことを一度では飲み込めなかった。

「つまりあなたの場合、力を使っている間は左目が『体術』の力を使用している人と同様、もしくはそれ以上の力を発揮できるようになったわけです」

桜夜は驚いた。まさか今まで自分のことを苦しめていた病気が自分の助けになるとは思ってもしなかったからだ。

「しかし、その症状は本当に害がないんですか？例えば、また病気が進行し始めるとか……」

「いえ、その可能性は無いに等しいです。言わばこの症状は不幸中の幸いとも言えるものでしょう」

その言葉を聞いて全身が安堵した。

「ただし、力を全開に使った場合は現在の所どうなるかわかりません。だから、その点だけは常に頭に入れてください」

「わかりました。注意しておきます」

こうして、桜夜は新たな力を身につけたわけだ。

（ほんと、有害なのか無害なのか、わからない病気だよな）

口からは自然とため息が漏れていた。

手近の電子パネルを確認すると、かなり時間が過ぎていることに気がついた。

「どうやら、すでに1時間も経過したらしい。」

そろそろ時間も時間だし、式場に戻るか。まさにそう思ったときだ。

「あのーすみません」

俺の後ろには1人の少女が立っていた。白銀の髪は背中いっぱい伸びており、コバルトブルーの瞳をしている。その雰囲気はどこかのお姫様を思わせるようだった。

「どうかしましたか？」

俺は優しく聞き返した。

「実はクロニカル学園の入学式があるのですが、道に迷ってしまつて……会場までの道のりを教えて頂けませんか？」

「いいですよ。俺もちょうど向うところだったんで。よかったら一緒に行きませんか？」

「そうですね、そうしてもらえるとありがたいです」

「それじゃあ、行きますか。あと30分くらいで始まっちゃいますし、遅れると恥ずかしいですしね」

「よろしく願います」

そういうと、俺と少女は入学式会場へと向った。

03 入学

入学式の会場である講堂に入ると大半の席が生徒によって埋められていた。

この講堂は中央に巨大なスクリーンが設置されており、それをぐるりと取り囲むようにして座席が設けられている。

「どうやら、無事に間に合ったみたいだね」

「そのようですね。案内してくれてありがとうございます」

「いやいや、お互い間に合っただけだよ」

「そういえば、まだ名前を言ってませんでしたね。私の名前はアクエリアス・ルビ・ノワールって言います。エリーって呼んでください」

「俺は九条 桜夜っていいいます。エリーさんって珍しい名前ですね」

「ええ、実は私の母は外国人なんです。私の名前も母が付けてくれたんです」

「へえ、ということは帰国子女なんですか？」

「いえ、こう見えても私は日本生まれの日本育ちなんですよ！こんな容姿ですから小さい頃からよく間違えられるんですけどね」

エリーはそう笑って答えていた。

「なんか意外ですね。でも、エリーさんの姿、とても可愛らしいですよ」

そう言うと、エリーの顔は少し赤みを帯びた。

「えへへ、そうですか？」

彼女は少し照れながらもそう言った。

「皆様、静粛にお願いいたします」

教職員の内の1人がそう言った。

どうやら、入学式が始まったらしい。

「ではまず、クロニカル学園理事長のご挨拶」

そう言うと言目の前にある巨大なスクリーンに初老を迎えた女性が映し出された。

恐らく、この人が理事長なのだろう。

理事長のはなしは、この学園の教育方針がどうのだから、今後の力の使い方はどうなのだから、桜夜にとって興味のわからないような話ばかりだった。

（ああ、この手の話は昔からどうも眠くなる……）

桜夜の意識がしだいに遠くなっていった。

「九条君、起きて、起きて」

「――う、うん……」

隣のエリーが小声で起こしてくれたようだ。

「もしかして、俺寝てた？」

「はい、それはもう、ぐっすりと」

「寝ちゃったか」

はぁッ。俺は一度大きなあくびをした。

「寝てからどれくらいだった」

「そうですね、10分くらいでしょうか。さきほど理事長先生のお話が終わったところです」

「結構寝ちゃったみたいだな」

「では、続きまして生徒会長の挨拶です」

スクリーンには、理事長に変わって1人の女性の姿が映し込まれた。

（あの受付にいた人は生徒会長だったのか）

スクリーンに映し出されていたのは桜夜の受付を済ませた人であった。

「新入生の皆さん、初めまして。生徒会長の三日月^{みかづき そら} 宇宙です。

まずは、ご入学おめでとうございます。

これから始まる学園生活ですが、人生の中ではきつとかけがえない思い出となることでしょう。

1人1人が大切なものを見つけ、実りのある学園生活を送りましょう。

短いながらも、これを生徒会長挨拶としたいと思います。

ご静聴、ありがとうございました」

「生徒会長、ありがとうございました。

では最後に新入生誓いの言葉。新入生代表お願いします」

その一言で、1人の男性がスクリーンのある壇上へと上がった。

「我々新入生は、この学園の生徒であること誇りに思い、自らの力を成長させるとともに、己自身も成長すること誓い、これを誓いの言葉とします」

そう言い終わると、その男性は自分の席へともどり、そして講堂全体から拍手が舞い起こった。

「では、これにて入学式を終了したいと思います。続きましてクラス発表に移りたいと思います。

皆様、自分の小型端末をご確認ください。

今からそれぞれの端末にクラスが表示されます。

その表示されたクラスがあなたの方のこれから過ごすクラスとなります。

クラス確認の後、各々のクラスへと移動してください」

桜夜は、自分の端末を取り出すと自分のクラスを確認した。

「エリーさんは何クラスになりましたか？」

「私はDクラスみたい。九条君は？」

「俺もDクラスだ。同じクラスみたいだな」

「そっか。よかった、同じクラスの人が九条君で」

「俺もエリーさんと一緒になんだかうれしいです」

「それじゃあ、クラスに行こっか」

「そうですね」

03 入学（後書き）

04 再会

Dクラスの教室の中は閑散とした雰囲気にもまれていた。

自分から積極的に新しい友達を作ろうとアピールしている生徒や、既に小さなグループを作っている生徒もいたが、大多数の人は自分の席に座ってじっとしていた。

まあ、学校初日だし、知人もほとんどいないのだからしょうがないことだろう。

俺はとりあえず自分の席を探すことにした。

席の場所は先ほどのクラス発表のときに、端末に映し出されていた。

このクラスでは、縦に7列、横に6列の計42人の生徒が在籍している。

その中で俺の席は左側から1列目、前から4番目の窓際というところに位置していた。

席に座ると隣から声が聞こえた。

「九条君の隣は私みたいだね」

その声の主はエリーだった。

どうやら、となりの席はエリーらしい。

「そうみたいだな。なんか学園生活でも縁がありそうだな」

「そうだね、学校でもよろしくね」

「よろしく」

そういうと、再び桜夜の耳にある声が聞こえた。

「お前もしかして、桜夜じゃないか？」

その声は、俺の前の席からだった。

「もしかして、お前ハイドか？」

「そうだ、久しぶりだな」

「1年振りくらいか？久しぶり」

ハイドと呼ばれるその男は、いかにもインテリと思わせる風貌で、髪をだらりと下げており、赤いフレームのめがねをかけている。

「ところで桜夜、隣のかわいい子は誰だ？」

「エリーのことか？今日知り合ったんだ」

「アクエリアス・ルビ・ノワールです。エリーって呼んでください」

「俺は鳳凰院　ハイドだ。ハイドでいい。桜夜とはいろいろあって、今はダチってわけだ」

「ハイドさんですか。よろしくお願いします」

「ああ、こちらこそ。ところで桜夜、俺たちの担任って誰なんだ？」

桜夜は疑問に思った。

なんでそんなことを聞くのだろうか？

「知らないけど、ハイドなんでそんなことを聞くんだよ？」

「お前入学案内見なかったのか？」

入学案内？たしかにそんなものを見た気がするがあまり目を通さなかった気がする。

「あんまよく見てないかも」

「おいおい、エリーは入学案内見た？」

「すみません、私もあまり見てません」

「マジかよ」

「なあ、なんでそんな担任が重要なんだ？小学生じゃあるまいし」

「はあー桜夜、この学校の最初のイベントがなんだか知ってるか」

「いや、知らないけど」

「やっぱりか、いいか桜夜、エリーこの学校はだな……」

ハイドが言い切る前にクラスのドアが開いた。
入ってきたのは、スーツを着た20代後半くらいの女性と30代
前半くらいの男性だった。

「HRを始めるので、生徒は自分の席に座るように」

ハリのある声はクラスの隅々まで響き渡った。

「しかも、担任はあの人がよ。ありえねえー」

ハイドがボソツと呟いたのは聞こえたが桜夜にはそのことが理解
できなかった。

「まずは、入学おめでとう。」

私の名前は折原おりはら 千鶴ちづるだ。このクラスの担任を持つことになった。

そして、私の隣にいるのが副担任の霧島きりしま 仁じん先生だ。」

彼女がそういうと、生徒1人1人の端末に名前と写真が映しださ
れた。

それを見た生徒は、こそこそと周りの生徒とはなし始めた。

「千鶴先生ってあの千鶴先生か？」

「だろうぜ。あの声といい、態度といい、間違いないだろ」

「静かにするように。」

この学園では、力の知識や制御などを学ぶわけだが、

まず、そのはじめとして明日、試験が行われる。

諸君の知っているとおり、試験はペーパーテストではなく、実技
試験だ。

ここからは、その試験の説明となる。

試験は3人1組のチームとなり、実戦形式の模擬戦を行うことと
なる。

相手は、我々教職員ということになるが、生半可な気持ちで参加

するならばはじめから辞退するように。

それと、チームは自分たちで好きなように組むように。
チームを組終わったら、端末を使って報告すること。
以上で説明が終わるがなにか質問のある者はいるか？」

手を挙げる者は誰もいなかった。

「いないようだな。では、これでH Rを終わる。

各自、明日の準備を怠らないように」

そういうと折原先生と霧島先生はクラスを後にした。



「じゃあ、俺らでチームを組んでいいんだな、ハイド、エリー」

「ああ、俺は構わないぜ、他に組めそうな人もいないしな」

「私も知らない人と組むよりはいいかな」

俺らはH R終了後、3人で学園無内の喫茶店に来ていた。

「そんじゃあ、決まりだな。俺が登録するよ」

桜夜は端末を取り出すと登録画面を開いた。

そして、登録欄に3人のIDを打ち込み送信した。

「これで登録完了だな。ところでハイド、担任紹介の時なんでみんながざわついたんだ？」

「お前折原 千鶴を知らないのかよ」

「残念ながら知らん」

「おいおい、冗談はよしてくれよな」

別に冗談ではなく、桜夜の記憶にはなかった。

「私は聞いたことがあるよ。たしかこの学園の教師陣の中でも5本の指に入るほどの力の扱いに長けてる先生じゃなかったっけ？」

「そのとおりだ。その強さから一部生徒の間では鬼神なんてあだ名で呼ばれている。俺らは明日、その鬼神と対峙しなきゃいけないってことだ。ちなみに、あの折原先生がここに赴任してから入学直後の試験では未だ負けなしだそうだ」

「負けなしか。なんだか楽しめそうだ」

桜夜は、その話を聞いてむしろ喜んでいた。

「まさか桜夜、折原先生に勝とうと思っているのか？」

「すごいな、ハイドは俺の心を読めるのか？」

「本気かよ、いくらお前でも今回ばかりは厳しいって」

「やってみなきゃわからないだろ」

「それはそうだが……全く、お前のそういうところは昔から変わらないな」

「まあな、そうとわかれば今日は先に帰らせてもらうわ。S・C・Sのメンテナンスもしなきゃいけないしな」

「そうか、そんじゃあまた明日」

「おう、エリーもまた明日」

「うん、バイバイ。明日は一緒にがんばろうね！」

05 試験

家に着いたのは午後4時過ぎのことだった。
当然出迎える者はいない。

現在、桜夜はわけあって学園内のマンションを一室借りて、1人暮らしをしている。

俺は制服から普段着に着替えると、デスクに腰掛けた。

「フルダイブモード、スタート」

目を瞑りそうつぶやくと、PCは起動し、意識が徐々に取り込まれていく。

フルダイブオペレーションシステムが開発されたのは、30年ほど前の話だ。

このシステムは脳とネットワークの間を無線通信によって直接繋ぐというものだ。

通信中の身体は睡眠状態と同じような扱いとなり、意識だけがバーチャル空間にダイブし、自分のアバターを操作できるわけだ。

わかりやすく言えば、夢の中で自分を自由自在に動かせるようなものだ。

当然このとき、身体には一切の負担がかからない。

だから、俺も長時間PCを操作する時はこのシステムを利用する。

次に意識が鮮明になった時には、周りは何もない白い空間に包ま

れていた。

どうやら、無事に接続することができたらしい。

それを確認すると、俺は慣れた手つきでS・C・S.の画面を開く。

S・C・S.には、力の制御をする元となるコアと、そのコアを制御するプログラムによって構成されている。

このコアは、常に一定の量のエネルギーを無限に生み出しており、2つの性質を持っている。

1つは、俺たちが力を使うための源になるとだ。

本来、力を使う場合は、自分の体力や精神力といったものを糧にする必要があるのだが、このコアのエネルギーを使用することでその代替となるのだ。

もう1つは、力に対する相殺性だ。

これは、異なるコアから生まれた力どうしがぶつかり合うことで力が軽減されるというものだ。

つまり言えば、力から身を守るのも力ということだ。

余談だが、攻撃は最大の防御という言葉の語源はここからきているらしい。

しかし、いくら無限にエネルギーを生み出していると言っても、一定時間のうちに使える力の量は限られている。

一般的なコアで連続使用が1時間ほどしか使えない。

だから、力を安定かつ無駄なく使用するためにプログラムの構成は重要と言うわけなのだ。

桜夜は、プログラムの適正化と再構築に移った。

プログラムの再構築は、難解なパズルを解くようなもので、普通の人は解けるようなものではない。

しかし桜夜は、これをいとも容易く解いてしまう。

これは、プログラマーだった母譲りの能力であり、今まで培ってきた努力の結晶でもある。

知識だけ見ればそこらへんの専門家よりも断然詳しい。

そして、桜夜は一度作業にのめり込むと自分の満足がいくまでもとの世界に戻ってこない。

それは、この日も例外ではなかった。



「すごい顔だけど、九条君大丈夫？」

登校2日目朝、開口一番にエリーから言われた一言だった。

「あー、もうダメかも」

見た目はいつもの姿だが、身体はガタガタだった。

「お前何時まで作業続けてたんだ？」

呆れ顔でハイドが話しかけてきた。

「今朝の4時くらいかな。プログラム完成させた後そのまま登校した感じた」

呆れ顔だったハイドがさらに重いため息をついた。

「そんなことして、今日の試験は大丈夫かよ」

「ああ、なんとかなる……はずだ」

桜夜は、大きな欠伸をしながらもそう答える。

「見るからに心配だ」

「九条君、寝ちゃダメだよ」

「ああ、わかってる。なんとしても試験が終わるまでは寝ないようにするよ」

そういうと、クラスに予鈴がなり担任の折原先生が入ってくる。

「どうやら、欠席者はいないようだな。」

では、今日の日程を説明する。

まず試験だが、30分後から、一組ずつ呼び出しを行う。

呼ばれたグループは第4演習所に集合するように！

また、試験の内容だが、

我々教師人との3対3の勝ち抜き戦となる。

以上だ。

では、各自呼ばれるまで待機しているように。

ちなみに、各クラスの試験状況は目の前の電子ボードに映しだされるので、

見たい人は自由に見てよい」

折原先生はそう告げるとクラスを後にした。

「桜夜、お前呼ばれるまで少し寝とけ」

「そうさせてもらうわ」

俺はハイドに向ってそう答える。

「呼ばれたら私たちが起こしてあげるから」

「ありがとう、エリー。よろしく頼むよ」

そういうと、早くも俺の意識は暗闇に包まれた。



「おい、起きろ！」

「起きて、九条君」

俺の意識は、再び舞い戻った。

少し寝たおかげか、先ほどよりも身体が軽い。

「どれくらいの時間だった？」

「2時間くらいだな」

どうやら、それなりに寝れたらしい。

「てことは、俺らは6組くらいか？」

「いや、残念ながら最終組だ」

桜夜は驚きの表情をみせた。

「いくらなんでも早すぎだろ。どうしてそんなに早いんだよ」

「折原先生が……」

エリーはそれしか言わなかった。

「あの先生はやはり鬼神だ。」

こっちもモニター越しにしか見れなかったが、容赦は無かった。
どの試験も10分以内に終えていやがる。

当然、勝てた奴は1人もいないな」

「そうか……」

桜夜は、黙りこんでしまった。

どうやら、想像以上にキツイ戦いになりそうだ。

そんな中、教室にアナウンスが流れる。

「九条、ノワール、鳳凰院、早く第4演習所にくるように。」

あと、10分以内に来ない場合は強制失格とみなす。

繰り返し……」

「どうやら、そろそろ行かないといけないな」

「なあ桜夜、エリー。俺らで一泡吹かしてやろうぜ」

ハイドがモチベーションを上げるためにそう言う。

「そうだね、私たちくらい勝ってギャフンと言わそうよ！ね、九条君」

「そうだな。よし、行くか」

3人は、第4演習所へと向った。

06 水冷師

第4演習所は四方100メートルほどある大きな空間だ。

この壁や床は特殊な素材でできており、爆弾が爆発しても壊れない強度を持つ。

だが、いまは本日の試験の影響で所々にヒビが入っていたり、床にはいくつか傷跡が残されていた。

「では、再度試験の内容を確認する」

そう、この仕切っている先生が担任であり、今日戦う相手である折原先生だ。

「試験は3対3の勝ち抜き方式で行う。」

勝敗の決め方だが、一方が敗北を認めるか、ジャッチが継続不可能と判断したときに決まる。

また、試験中に外部から何らかの力が加えられた場合、無条件で敗北とする。

無論、このルールに従わない者も無条件で敗北になる。

最後に意思の確認だが、全員この試験に参加するんだな？」

「はい、参加します」

桜夜、エリー、ハイドの3人は声を合わせて答えた。

「よろしい。では、早速試験に移る。」

最初の試験対象者は前にでるように」

3人は目を合わせた。

「最初に誰が行く？」

ハイドがそう問いかけてきた。

「あの12人とも、私が一番手でいい？」

そう言ってきたのは、エリーだった。

「俺はいいが、桜夜はどうだ？」

「構わないぜ。俺は一番手って感じではないからな」

「ありがと。じゃあ行ってくるね」

そういうと、エリーは一步前にでた。

「ほうほう、最初の相手はノワールさんですか」

教師陣の中から前にでたのは副担任の霧島先生だった。

「では、両者自分のS・C・Sを起動させてください」

ジャッチがそういうと、先生は起動音を唱え始めた。

エリーもそれに続けて、自分の起動音を唱えだした。

『万物の源となる力、我に貸し与えん』

そういうと、彼女の左腕にある腕輪型のS・C・Sは青く光だし、彼女を包み込む。

服は制服から、フード付きのローブへと変わり、右手には彼女の身長と同じくらいの杖が握られている。

その姿は、さながらRPGの魔法使いを思わせるようだった。

対する先生の方も姿こそいつもと変わらないワイシャツ姿だったが、左手にはステッキが1本握られていた。

「では、始め！」

ジャッチの一言で試験が始まる。

先に動いたのはエリーだった。

彼女は開始直後、杖を振る。

そこからは、大量の針のようなものが射出される。

放たれた針は相手を捕らえ、辺りには嵐のような音を鳴り響かせる。

しかし、相手はその攻撃に全く動じなかった。

霧島は、手に持っているステッキを振りかざし、彼女の攻撃をかき消した。

「どうやら、あなたは生成系の魔術がお得意のようですね。

先ほどののは、生成した水を高速で打ち出していたのではないか？」

霧島は余裕の表情で問いかけた。

「ええ、正解です」

「ここまで完璧に作りだすとはさすがだな。しかし、攻撃としては火力が足りねえな。

これでは、一生かかっても私を倒すことはできないぜ」

そう言うと霧島はステッキで2回、コツ、コツと地面をついた。

そこからは、青白い火花が出現しバチバチと音を立てながらしだいに大きくなる。

「攻撃というのはこういうもののことをいうだ」

次の瞬間、一筋の光が弾丸となって彼女に向かって突き進む。

エリーはとっさに水の壁を作り弾丸に備える。

だが、弾丸は壁を貫き彼女に直撃する。

直後に反動で3メートルほど吹き飛ばされ、地面に叩き付けられる。

「電撃……」

彼女は強く打った背中をかばいながらも立ち上がった。

「正解だ。今のは私のステッキを始点、ノワールさんを終点として

放った電撃です。

水で壁を作ったようだが、その程度では止めることは無理だな。と、言ってもコンクリートの強度があっても貫くけどな」

彼女は苦し紛れに杖を振る。

今度は、硬貨ほどのサイズの水弾を放つ。

しかし、その攻撃が逆に状況を悪化させた。

新たに放たれた電撃が水弾を通して数発、再び彼女を襲った。

彼女の身体は叫び声とともに宙を舞、地面に落ちる。

頭を軽く打ったせいかな、視界がぼやける。それに吐き気もする。

もはや、彼女はまともには戦えなかった。

「どうする、サレンダーするか？」

霧島が勝利したことを確信するかのように問いかける。

「…しない…」

「ん？なんだって」

「サレンダー…しない」

エリーはボロボロの身体に力を込め立ち上がる。

「サレンダーなんてしない。最後までやります」

彼女は力強く言い放った。

「ほう、いい根性してるな。だが、まだ力不足か。

その根性に免じて次で最後にしてやろう」

そういうと、霧島はステッキの先をエリーに向ける。

今度の雷撃は先ほどのように青白いなんて生ぬるいものじゃない。黒色の雷が轟音を立てて大きくなる。

彼女もその攻撃に対して身構える。

しかし、良案なんて思い浮かばない。

（構えたって変わらない。なにか、考えなきゃ）

彼女は、ある頭全てを使って思考する。

電氣を通さず、かつ、破壊力のあるもの。それこそ一撃で決めれるような代物を。

そして、1つのものが浮かび上がる。

エリーは自分の杖の前に突きだし、力をためる。

今度は、直径50センチほどの水の球体を作り出す。

「最後の悪あがき。まあ、いいだろう。これで最後だ」

そう言うのと、ステッキの先から雷撃、いや、稲妻の槍が放たれる。

「打ち砕き、そして貫けー」

エリーも水弾を放った。

07 武神たる肉体

結果から言うと、彼女は勝つことができなかった、それに、負けもしなかった。

彼女の放った水弾は稲妻の槍を吸収し、霧島を貫いた。

霧島がそれによって倒れると同時に、彼女も技の反動でその場で崩れ落ちた。

「そこまで！ 両者、試験継続不能のため引き分けとする」

審判のジャッジが終わるとスタンバイしていた治療班が彼女たちの元へと駆け寄った。

「いや、私は大丈夫だ」

そう言ったのは霧島先生だった。

「私も軽い貧血のようなものなんで大丈夫ですよ」

エリーもそう言って治療を断った。

「ノワールさん、すばらしい魔術だ。俺も久しぶりに驚いたよ」

「ありがとうございます、先生」

「それにしても、最後に放った水弾は何だったんだ？ 見たところによると、俺の電撃を吸収したようだった。それに、あの程度のサイズならあのような威力は無いはずだが……」

「先生、純水って知っていますよね？」

「ああ、不純物のほとんど含まれていない水のことだろ」

「ええ、先ほど私の放った水弾は、その性質を少し応用して放ったものなんです。純水には2つの性質があって、1つは電気を通さないという性質です。もう1つの性質は、物質を吸収しやすいという性質です。この2つを利用して、水弾に電気をはじくという性質と

魔術を吸収するという意味合いを持たせたんです」

「なるほどな、だから俺の電撃をはじめ、なおかつ、吸収すること
あの爆発的な威力を生み出したわけか。その場の判断としては上
出来だな」

そういうと、霧島はやや身体を引きずりつつ、教師陣のほうへと
戻っていった。

「では、第二試験を行いますので、ノワールさんは元のところへ戻
ってください」

「わかりました」

「エリー、すげえーじゃないか」

「見事な逆転だったよ」

ハイドと桜夜は戻ってきたエリーとハイタッチした。

「ありがとう2人とも。でも、勝ち抜くことはできなかったよ」

「いや、教師相手にあそこまで戦い抜くなんて勝ったと同じだよ」

「そうそう、見事な魔術だった」

ハイドに続いて桜夜も再び褒め称えた。

「そんなじゃあ、今度は俺の番かな」

そう言うハイドは先ほどエリーが試験を行ったところへと歩き
だす。

「ハイド君負けないでね」

エリーはハイドにエールを送る。

「ああ、勝ち抜いてみせるぜ」

「こっちの準備はできたぜ、試験相手は誰なんだ？」

そういうと、ハイドと同じ制服姿のしかも、上級生の男子生徒が

前に出てきた。

「俺がお前の相手だ」

「おいおい、俺の相手は先生でなくて、生徒かよ」

ハイドは落胆の表情を浮べる。

「おい、敬語くらい使えないのかよ。ちなみになめてもらっても困る。こう見えても教師陣には及ばないが、それに準じる程度の実力は持っているつもりだが」

「まあ、いいや。そんじゃあ、全力で行かせて貰うぜ」

「ああ、受けて立つぜ」

「では、準備が整ったようですので、両者はS・C・Sを起動させていただきます」

生徒とハイドはそれを合図に起動音を唱える。

『武神の魂、我に今宿らん』

その言葉に反応し、ハイドのペンダント型のS・C・Sは赤い光を放ち、姿を覆う。

ハイドの服には、何ら変化は見られなかったが太ももの辺りには2本の短剣が装備されていた。

対する上級生も見た目には変化は無かったが右手には1メートルほどの剣が握りしめられていた。

「そういえば、まだ俺の名前を名乗っていなかったな」

「その必要はないですよ。たぶん一瞬のうちに終わりますから」

「そうか、では、一瞬のうちに決めて上げようじゃないか」

「ねえ九条君、ハイド君ってどんな力を使うの？」

「あいつか？ 見てればわかるさ。といっても見えるかどうかはわ

からないけどな」

「どうゆうこと？わけがわからないよ」

「まあ、集中してみている」

「では、始め！」

ジャツチの一言がいい終わった刹那、ハイドの姿は消え、次の瞬間、空気を切る爆音とともに、ハイドの姿が上級生の目の前に現れた。

「カラン……」

その時、上級生の握っていた剣は地面に落ち、その後やや遅れて地面に倒れ落ちた。

「だから一瞬だって言っただろ」

「勝者、一年生ハイド」

08 鬼神

「九条君、いまハイド君は何をしたの？」

エリーは何が起きたか理解できず、ポカンとした表情で桜夜に問いかけた。

「やっぱり初見では何が起こったかわからなかったか。そうだな、簡単に説明すれば、あいつは開始と同時に超高速で殴ったんだ」

「殴ったの？ 私にはただ消えたようにしか見えなかったけれど……」

「普通の人の目では、基本的に捕らえられないからな。あいつのトップギアの速さは時速330キロ、ほぼ音速と同速だからな。ある程度『体術』を鍛えないと反応するのは難しいだろう」

「そんなに速いんだ。もしかして、ハイド君って『体術』の達人？」

「まあそんなところだ。あいつは昔から、『体術』に関しては天才的だからな。むしろ、天性の才能と言ってもいいくらいだろう」

「天性の才能かあ……」

その言葉を聞いたエリーはどこか虚ろな表情だった。

「まったく、先輩も油断しなかったら、少なくとも一撃では終わらなかったのに」

試験終了後、ハイドに殴られ気絶した先輩は、救護班に運ばれ演習所を後にしていた。

「では、ハイドさん。引き続き試験を継続しますか？」

「もちろんです」

「わかりました。では、引き続き試験を行いますので、準備をしてください」

審判の先生はそう言うと言った場所へと戻っていった。

そして、入れ替わるようにして一人の先生が入ってくる。

「やっぱり最後の相手は折原先生ですか」

ハイドの目の前に現れた先生は既にS・C・Sを起動しており、両腕にはハンドガンよりも少し大きい銃が二丁、いつも着ているスーツは機動隊が身に着けているような重装備の服に変わっていた。

服装のせいだろうか、心なしか軍人のような雰囲気を出している。「そうだ。他の先生じゃなくて残念だったな」

「確かにそうですね。本当に残念です」

ハイドは半ば諦めたような顔でそう言い捨てた。

「そういえば、先生は相当お強い聞いたのですけれど、本当なんですか？」

「ああ、本当だ。といっても、今は昔のように海兵隊一個小隊とやり合うのはむりだがな」

折原は顔に笑みを浮かべながら答える。

「海兵隊って……」

鬼と呼ばれるからといって、まさか、海兵隊とやり合えるなんて。

「では、そろそろ準備のほうはよろしいでしょうか？」

「ああ、こちらのほうはいつでもよい」

「俺も準備は完了しました」

心の準備は……

ハイドは小さくそう呟く。

「では、始め！」

ジャッチの一言で桜夜たちにとって三回目の試験が始まる。

（おそらく、まともな方法では、攻撃を当てることはできない。なら……）

そう思考すると、先ほどと同じように右足に全体重をかけ、地面

を蹴り飛ばす。

ハイドの身体は瞬時に加速され、音速と同じ速度で駆け抜ける。開始直後、十メートル程あった距離が、わずかコンマ何秒かで縮まっていく。

距離が縮まるのと同時に、こぶしに力を込める。

狙いは折原の腹だ。

折原との距離がゼロになった瞬間、ハイドは力を込めた腕を前へと出す。

おそらく、当たればコンクリート程度の強度なら、粉々に砕けるだろう。

しかし、空を切った。

ハイドのこぶしは何も捕らえることはなかった。

それどころか、先ほどまで前にいた折原の姿が視界から消えたのだった。

「スピードと威力はまあまあだな。だが、少し単調すぎないか？」
声の主は折原だった。しかも、その声はハイドの左側から聞こえる。

「いつの間に俺の左側……」

言い終わる瞬間、ハイドの身体が強制的に右のほうへと動かされた。

いや、この場合は吹き飛ばされたというべきだろうか。

どちらにしろ、ハイドの身体は宙を舞いそして、演習所の壁へと背中から叩きつけられる。

「ぐはっ……」

肺の中の空気は一気に放出され、腹部へ強烈な痛みが走る。

壁にぶつかった衝撃のせいか、少し視界も歪んで見える。

「痛ってーな、何なんだよ、あの速さは。普通じゃねえ」

「どうした、手加減なしでかかってきていいんだぞ」

折原はハイドに次の一撃を浴びせようと、ゆっくりと距離を詰めてくる。

「わかってますよ、そのくらいは」

ハイドは痛む身体をおこし、再び全身に力を込める。

（といっても、このままじゃ一撃も当てれそうにないな。なにか、方法はないものか）

短い時間の中である頭をフルに回転させる。

そして、1つの案がハイドの頭の中に思い浮かぶ。

（よし、久しぶりにあれをやってみるか）

ハイドは太ももの辺りにある2本の短剣を両腕に装備する。

「ほう、今度は剣術かなにかか？」

「まあ、そんな所ですかね」

そう言うのと、再び右足に全体重をかけ、地面を蹴り飛ばす。

加速された肉左体は、距離を詰め、再度反撃の隙を作る。

だが、またしてもハイドは折原を捕らえることはできない。

「先生、同じ手は食いませんよ」

ハイドはとっさに握っている剣を振るう。

直後、ハイドのいた場所へ高速の蹴りが放たれるが、それを剣をクロスにして受け止める。

勢いで多少後ろに飛ばされたが、難なく受身を取ることができた。

「ほう、やるじゃないか。たった一度見ただけで、私の蹴りを受け止めるとはな」

「まあ、目は昔からいいんで」

「そうか。だが、その程度の力では私を倒すことはできんぞ」

「分かってますよ。なら、こういうのはどうですか」

ハイドは奇襲をかけるかのように、二本の短剣を投てきする。

「甘い、その程度」

折原は、握られている銃の引き金を引く。

放たれた弾丸は剣の軌道をずらす。

「ちくしょー、はじかれた」

「もう小細工も終わりか？ならそろそろ決めさせてもらおうぞ」

折原は力強く地面を蹴る。

距離は一瞬のうちにつまり、音速の蹴りがハイドを襲おうとする。

「ちよっと待った、降参。サレンダーするぜ」

その一言の直後、一発目にハイドを襲った蹴りが顔のわずか数センチ手前で止まる。

「しょ、勝者、折原先生」

その言葉を、聞いてハイドはようやく安堵の表情を浮べる。

「どうして、降参した？」

折原は腕組みをしてハイドに問う。

「俺が勝てないということは充分に理解できましたから」

「勝てないから、自分から降参をしたのか。情けない」

「正直言って無理なものは無理ですからね。それに……」

「それなんだ」

「先生を倒す人は俺じゃないっすからね。俺は俺自身の役目を果たしましから」

「そうか、なにか作戦がありそうだな」

「さあ、どうでしょうかね」

ハイドはやや濁しながら、その場を後にした。

「時間は稼いでやった、後は任せたぜ。桜夜」

「ああ、任された。お前のくれた時間は無駄にしない」
桜夜は、ハイドと手を交わし、試験場へと入る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9337u/>

コネクト

2011年10月9日11時28分発行